

## Blog

活動ブログ

# 【ご報告】第4回放課後勉強会「子どもの声、願いに寄り添った居場所をつくるには」～言語化しきれない思い、声なき声まで耳を傾けて～

2023.07.12 研修

放課後NPOアフタースクールでは、放課後現場運営者、運営に関わるスタッフ、自治体職員の方、そのほか子どもの放課後の在り方に関心があるすべての方を対象に、年度内で全3回にわたり、オンラインによる放課後勉強会を開催しています。

▼2022年度の研修のレポートはこちら

第1回目 [「放課後の心地よい居場所をつくる上で大切にしたい子どもへの向き合い方」](#)

第2回目 [「子どもの発達や特性に応じた関わり方・場づくりを考える」](#)

第3回目 [「子どもの育ちやそれを支える地域のこれからを考える」](#)

放課後NPO  
779-20-6

第4回放課後勉強会 オンライン開催 参加無料

子どもの声、  
願いに寄り添った  
居場所をつくるには

対象 現場運営者（自治体職員・ボランティア）、家庭の方  
子どもの支援に関わる方、自治体職員の方、他どなたでも

6月30日(金) 10:00-12:00  
ゲストスピーカー

加賀大寶さん  
こども家庭庁 成育局 成育環境課  
居場所づくり係 居場所づくり専門官

荒木裕美さん  
石巻市 子どもセンターらいつ 館長

今年度は全3回の放課後勉強会を予定しています(6月・9月・2月)

▼第4回目のご案内情報はこちら

<https://npoafterschool.org/archives/news/2023/05/39332/>

子どもまんなかの  
居場所づくりで  
大切にしたい視点



加賀 大資さん  
Kaga daisuke

子ども家庭庁 成育局 成育環境課  
居場所づくり係 居場所づくり専門官

放課後の活動づくりを  
通じた居場所づくりの探究



平岩 国泰  
Hiraiwa kuniyasu

放課後NPOアフタースクール 代表理事  
新渡戸文化学園 理事長

子どもが想いを  
伝えられる場の  
づくり方



荒木 裕美さん  
Araki hiromi

石巻市 子どもセンターらいつ 館長  
NPO法人ベビースマイル石巻 代表理事

日本全国から申し込みをいただいた1100人以上もの参加者の皆様とともに、一児の母であり、この春からアフタースクールに勤める新米スタッフでもある私（筆者）も初参加させていただきました。

■子どもの声を聞きながら“居たい” “行きたい” “やってみたい”と思える居場所づくりを  
まず登壇されたのは、子ども家庭庁の加賀さん。冒頭、参加者へ「子ども家庭庁を知っていますか？」と問いかけます。投票機能を使っの調査結果は「ほとんど知らない」が9%。「聞いたことがある」の68%を含めるとしっかり認知していない方が8割近くも！  
恥ずかしながら、実は私もその中の一人で、「どんなことをしてくれるの？」「何が変わるの？」と頭の中は「？」だらけです。

子ども家庭庁は今年4月に発足したばかり。なかなか認知が広がっていないという現状がありながらも、政策の柱のひとつとして掲げている「子どもまんなかの居場所づくり」について、加賀さんは「有識者を交えて議論を重ねながら指針を策定し、今はその中身を詰めている段階」と話され、着々と取り組みが進められていることが伺えます。

また「居場所づくりにおいてもっとも大事にしているのは、“居たい”“行きたい”“やってみたい”の3つの視点。そのために直接子どもの本音を聞く機会を設けています。

● 子ども・若者の居場所づくりにおいて大切にしたい視点



- 居場所づくりにおいて重要なことは、子ども・若者の主体性の尊重である。
- その場を居場所と感じるかどうか等は、本人が決めることである。
- そうした観点から、子ども・若者の声（視点）を軸に「居たい・行きたい・やってみたい」の3つの視点で整理した。 \*子ども・若者の声には相互に矛盾するものもあるが、多様な居場所づくりにおいてそれぞれ尊重したい視点であるため、そのまま記載した。居場所が定められる根拠として受け止められることを願う。

ちの意見がきちんと反映されているかなどフィードバックしてもらおうんです。そうすることで、子どもたちとのギャップを少しでも埋めていければと考えています」とも。

こども家庭庁ではこうした新しい試みも取り入れながら、まさに「こどもまんなか」の居場所づくりが始まっているようです。

### ■心身の成長を促す放課後の居場所づくりは、子どもの幸せに貢献できる！

続く当団体・代表の平岩は、「放課後の活動を通じての居場所づくりの探究」と題し、データに基づいた子どもを取り巻く環境の変化、これまでの放課後NPOの活動から得た経験を踏まえながら、なぜ子どもにとって学校や家庭以外の居場所が必要かに言及。

改めてアフタースクールや学童保育など放課後事業の存在価値を考えさせられる時間になりました。

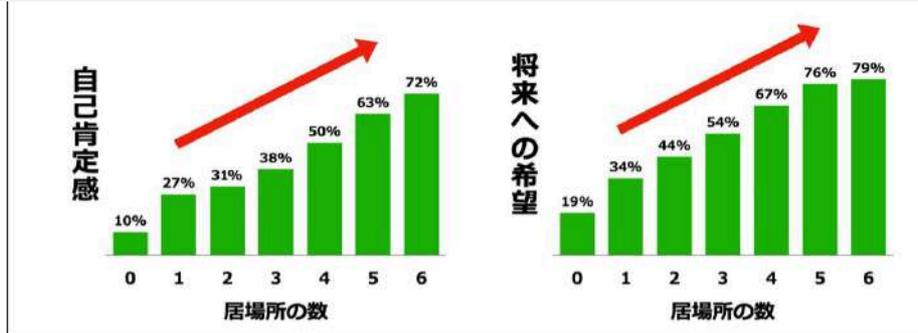


日本の子どもたちの現状として、「外で遊ぶ時間が減った（時間）、一人で過ごすことが多い（仲間）、子どもが巻き込まれる事件・事故が増加（空間）と3つの「間」が失われ、ホッとできる居場所がないと感じている子どもが4人に1人も。

昨年、小中高校生の自殺も過去最多となり、こうした背景には諸外国に比べて子どもたちの自己肯定感が下がっていることとも関わりがあるのでは」と分析。

続けて調査データを交えながら、いかに放課後の時間と居場所づくりが子どもたちに大切であるか、その理由を次のように挙げました。

- ・居場所の数が多いほど、自己肯定感が上がる
- ・居場所の数が多いほど将来への希望が高まる
- ・放課後時間と重なる午後4時ごろ体温がもっとも上がり、体がよく動き成長につながりやすい



(出典) 内閣府『令和3年版子供・若者白書(概要版)』をもとに作成  
\*2019年度のデータ/小数点以下は四捨五入/1.5~2.9歳対象(n=6000)

人間の体温は、午前3時頃の夜中に最も低くなり、**午後4時頃に最高**となります。このような日内変動は、ヒトが長い年月をかけて獲得した生体リズムの1つです。

したがって**午後4時前後の放課後の時間帯は、最も体がよく動く時間**なのです！

早稲田大学人間科学学術院  
前橋先生  
(子どもの運動の第一人者)

**体温リズムに関与する脳内ホルモン**

これだけを取ってみても、やはり放課後はゴールデンタイム！子どもたちの心と体の成長を促す貴重な時間帯というわけです。そんな可能性を最大限に引き出すためにはどうすればいいの？放課後NPOのアフタースクールでも実践しているキーワードが語られました。

#### ▼居場所のキーワード

- ①ありのまま...人と同じでなくてよい。その子らしさを大事に
- ②自己決定 ...その日何をするかは、自分で選んで決める
- ③役立つ ...子ども自身が先生になる
- ④伴走者 ...子どもの「やりたい気持ち」に大人が寄り添う

「以上の4点は、これまで探究する中で気づいたキーワードですが、実はオーストリアの精神科医で心理学者のアルフレッド・アドラー氏が示す『幸せの3条件』や、慶應義塾大学大学院で幸福学を研究する前野隆司教授が定義づける『幸せの4つの因子』とよく似ているのです」と紹介。

そして「我々が考える居場所のキーワードは人の幸福と極めて似ていることから、放課後の居場所が子どもたちの幸せに貢献できると考えています」と結びました。

幅広く、今年年間来館者数が約2万7千人と多くの子どもや若者が集う児童館になっています」と話します。



今回語られた「子どもの想いが伝えられる場のつくり方」には、そんな子どもや若者が通いたくなる児童館づくりのヒントが満載でした。

なかでも興味深かったのは、施設の運営を、利用する子どもたち自身が地域と連携しながら行っている点。

「そもそも始まりも『街のために何かをしたい!』という子どもたちの熱意から。どんな街にしたいかみんなで話し合いを重ねて白地図に夢のまちプランを作成し、その子どもたちの声を市に提案して児童館『らいつ』が実現しました。この名称も、子どもセンターのコンセプトや条例も子どもたちが考えてつくったものです」と荒木さん。

立ち上げ当時から変わらず今も大事にしているのは、「子どもの声を活かす」取り組みだそう。「第一に考えているのは、子どもが声を上げやすい環境づくりです。らいつでは、地域の課題や活性化に取り組む『子どもまちづくりクラブ』、利用ルールを決める『子ども会議』、利用者全員が付箋に書いて意見を伝えられる『ビッグボイス』など、子どもがアクションを起こして発信できる機会をたくさん設けています。

子どもまちづくりクラブ



小学5年生～高校生世代  
月1、2回 土曜日午後  
子どもたちが地域の一員として、まちの課題、活性化に取り組んでいます。今回は「防災・震災伝承」今のテーマは「居場所」。

子ども会議



小学4年生～高校生世代  
月2回 土曜日午後  
らいつの利用方法について意見を出し合います。ルールを作るだけではなく、「ルールで縛るのではなく自分たちでその場で解決しよう」と決まることも。

Bigvoice (ビックボイス)



子ども会議で企画実施。利用者がだれでも参加でき、事業や利用方法に反映されます。ヒアリング・付箋に書く・シールを貼るなど声を出しやすい工夫をしています。

イベントも『子ども企画』といって誰でも発案できる仕組みに。このようにみんなの声がしっかり届いて、反映されているという実感を持つことで、子どもの自信や成長につながればいいと思っています」

と子どもの話を聞いてくれる』と信頼関係を育てていけば、子どもも安心して声を上げられるのでは」

信頼関係の構築は一朝一夕にはできず、日ごろから意見交換や行動を見守るといった積み重ねがあってこそ。「子どもの声に応えるための人材や予算の確保」という課題がありつつも、子どもの力を信じて伴走し続けている荒木さんをはじめ、スタッフの方々に頭が下がる思いです。

## ■トークセッション



リレー講演後は、参加者からいただいた質問に対して3人が答えるトークセッション。子どもたちと日々真剣に向き合っているからこそ感じる現場の方々の疑問は、共感できるものばかりで、「居場所づくりのために大人がどうあるべきか」を考える良いきっかけを与えていただきました。

**Q** 子どもの声を聴くことが大事だとわかっていても、聴いてしまったら反映させなきゃというプレッシャーが。簡単そうで難しい。

**A** 聴くことに意味があるので、必ず叶えてあげなくてもいいんです。大人もそうですが、親身に想いを聴いて受け止めてくれるだけで救われることもあります。結果ではなく過程を大事にしてください。（荒木さん）

**Q** 子どもの声を聴く際、どうしても声の大きい子の意見に偏ってしまいます。

でもいいよ」という雰囲気づくりも大事。（荒木さん）  
子ども会議にこだわらず、いろんな活動の場で子どもたちの話を聞くチャンスはあります。そのときの方が本音を引き出せるかも（平岩）

**Q 子どもの声や願いに寄り添った居場所をつくるために、大人や行政にできることは？**

A まだ始動して間もないこども家庭庁ですが、これまでの経験を踏まえながらこどもまんなかの居場所づくりを進めています。ただ、子どもたちは日々変わっていくので、現場に行くことを大事にしていきたい。（加賀さん）  
政策が動けば現場はすぐ変わります。そのためには、まずは大人が変わること。こどもまんなかの居場所づくりが大事という意識をもち、諦めず仲間を集めて地域を巻き込んで、その意識を社会に浸透させていくことが、行政を動かすことにつながると思っています。（荒木さん）

#### 一視聴を終えて...

9年も前になりますが、私も我が子の放課後の居場所探しに苦労した者のひとりです。最寄りの育成室（学童保育）は定員オーバーで、空きのある育成室に行くことになったのですが、自宅からも学校からも少し遠く、通い疲れて結局途中で退室することに。  
子どもと話し合い、代わりに始めたのが習い事と塾通いでした。当時から「本当に子どものために良かったのかな？ ちゃんと子どもの本音を聞き出せていたのかな？」という葛藤もあったため、今回の講演の中で胸に刺さるワードが幾つもありました。

まず、子どもの声を聴く。これは簡単なようですが、時間に追われていると疎かになりがちなこと。改めて胸に刻み、我が子にはもちろん、アフタースクールのスタッフとして大切にしていきたいと思います。

放課後の時間がゴールデンタイムというならば、学童や児童館、アフタースクールは子どもたちの目が輝いてワクワクする経験ができるコンテンツがいっぱい詰まった宝石箱かもしれません。そこには、大人が用意した宝石だけでなく、子どもたち自身が考えた宝石もたくさん入れてあげられたらもっと輝きが増すことでしょう。

ただ、子どもたちを安全に見守るには十分な人の配置やスペース、そのための財源の確保も必要です。取り巻く環境にはまだまだ課題もありますが、今回の勉強会を入り口に、放課後は子どもの成長につながる大事な時間であることを感じていただけましたら幸いです。すべての子どもたちが「安心してのびのびと過ごせる居場所」を持てるようにと願っています。



子育て経験や教職免許取得の際に得た知識を活かそうと、放課後NPOアフタースクールのスタッフに。一方で、フリーライターとして20年以上行ってきた雑誌・書籍・広告等への執筆やコピー制作も継続。アフタースクールでは文章を書く楽しさを伝えられたらという思いから「子どもライタープログラム」を進行中。

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION

本研修は、日本財団様の助成により開催いたしました。

全国の放課後の居場所運営者が学び合う勉強会継続・発展のためにご寄付をお願いします

<https://npoafterschool.org/archives/news/2023/06/39711/>

**【本件および研修会等のご依頼に関するお問い合わせ先】**

特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール 事業開発チーム

Mail: [kaihatsu@npoafterschool.org](mailto:kaihatsu@npoafterschool.org)

※[at]を@に変換してください。

LINEで送る

シェアする 9

ポスト

Previous

【感動体験プログラム】みんながわくわくする発明品をMESH&...

TOPへ

Next

【上板橋第四小学校あいキッズ】「居たい・行きたい・やってみた...

カテゴリごとに見る

アフタースクール

企業協働

行政協働

スタッフブログ

イベント

研修

遠足

月ごとに見る

年月を選択

## Recently

最新の記事



【ソニーグループ 感動体験プログラム】  
子どもも、大人も。可能性を拡げた、新しい挑戦だらけの半年間

2024.4.25 企業協働



【峡田小にこにこすくーる】HONDAの社員さんと「ものづくり」の楽しさを体感！

2024.4.15 アフタースクール



記者になって課題解決のヒーローを直撃取材せよ！私たちにはどんなことができるかな？

2024.4.12 企業協働

TOP

活動ブログ

【ご報告】第4回放課後勉強会「...

Page Top

私たちについて

About us

団体概要

採用情報

アフタースクール事業

After school

企業×NPO ソーシャルデザイン事業

Social Design Project

ご寄付・ボランティア

Donate / Volunteer

自治体の皆様へ

放課後運営団体の皆様へ

News お知らせ

Blog 活動ブログ

よくあるご質問

メディアの方へ

プライバシーポリシー

情報セキュリティ基本方針

お問い合わせフォーム

放課後 NPO  
アフタースクール

特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール

〒113-0033 東京都文京区本郷1-20-9 本郷元町ビル5F [\(地図を見る\)](#)

TEL : 03-6721-5043 / FAX : 03-6721-5044

[関西事務所はこちら](#)

放課後はゴールデンタイム  
Creating a fun-derful after-school experience, together.

GOOD DESIGN

## Blog

活動ブログ

# 【ご報告】第5回放課後勉強会「子どもまんなか！ 私たちが描く、これからの放課後」多様な子どもの 育ちを支える地域の力

2023.12.08 研修

放課後NPOアフタースクールでは、放課後に関わる方や子どもの居場所づくりにご興味のあるすべての方を対象として、オンラインにて放課後勉強会を開催しています。

第5回目のテーマは「多様な子どもの育ちを支える地域の力」。

地域に子どもの居場所をつくるということがどういうことなのか、放課後現場と地域のかかわり方など、放課後NPOや全国での実践事例を交えてお話をしました。

放課後 NPO  
アフタースクール

第5回放課後勉強会 オンライン開催 参加無料

多様な子どもの育ちを支える地域の力

子どもまんなか！  
私たちが描く、これからの放課後

10月20日(金) 10:00-11:50

- オープニングトーク  
登壇者：放課後NPOアフタースクール 代表理事 平野 昌博
- 「地域の大人の願いと子どもたち」
- 実践事例共有  
「地域の力とともにつくる放課後の活動と学校施設活用」
- 「子どもの育ちを地域ぐるみで支えるために」  
登壇者：文部科学省総合教育政策局地域学習推進課地域学校連携推進室

対象 放課後現場運営者（放課後児童支援員の方など）  
子どもの居場所づくりや支援に関わる方、自治体職員の方、その他ご関心の方

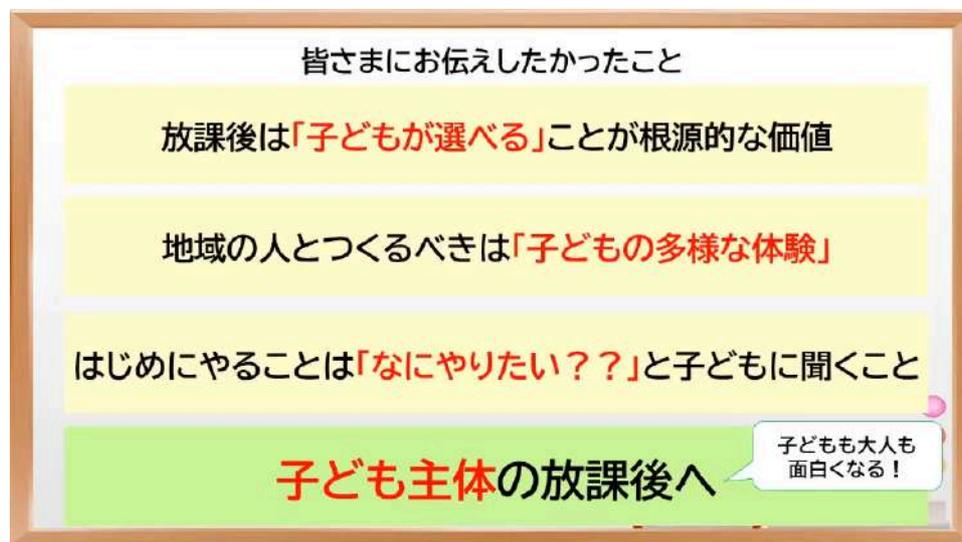
今回の報告レポートは「放課後の事業を通して、地域と連携するっていいことだと思うけど、誰と何をやればいいのか？」という、放課後と地域連携のいろはのいの字を知りたい筆者の視点からお届けします。

## ■オープニングトーク

オープニングトークでは当団体代表の平岩が、地域と連携することで子どもたちはより豊かな体験をできること、地域の方から「市民先生」を募ることでその体験をより深められることなど、地域連携のスタートラインに立とうとしている人にも向けてお伝えしました。

「何から地域連携を始めればいいのか」という質問に対しては、「なにやりたい？と、子どもに聞くところから始めてみる」と述べ、「放課後は小さなことでも子どもが自分で選べるのが大切」「放課後の自由度こそが、子どもも大人も楽しくなる要素」とまとめました。

地域の皆さんと一緒に活動するなると、手続きや人手が...という部分も想像してしまいがちですが、子どもたちがやりたいと望んでいることがわかると大人もやる気が出る。難しく考えすぎず、まずは子ども自身に聞いてみるという一歩がポイントでした。



## ■Part1 「地域の大人の願いと子どもたち」

続く放課後NPOスタッフの渡部の話では、地域の大人との連携やかかわり方について、インタビューを通じてより深く考えを巡らせます。

「楽しんでいる大人（自分）を見て、子どもたちに前向きな将来を感じてほしい」、「習い事のように肩に力を入れすぎず、なんだか楽しいなと感じたり、『できた』を自信につなげてほしい」といった地域の大人がもつ子どもたちへの願いや、「子どもたちの過ごし



放課後を起点にした、「地域との連携やつながり」の価値

- ✓ 色々な思いを持った大人との「出会い」の機会になる。知り合える。
- ✓ 限られたスタッフよりも、子どもの選択肢を広げることができる。
- ✓ 地域の大人同士のつなぎ目にもなれる。(楽しいことでつながれる！)

子どもにとっても大人にとっても、居場所が増える。  
生活の豊かさや楽しみ(≡ウェルビーイング)につながる。

地域の大人が協力し合うことによって、放課後の過ごし方や運営に選択肢が増えるだけでなく、子どもをまんやかにした地域内でのつながりが大人の居場所にも広がっていく。放課後の時間は、子どもだけではなく大人にとってもWell-beingにつながるのですね。

## ■Part2 実践事例共有ー「子どもと大人の『好き』をつなげる人材発掘」

明るく語り始めたのは、放課後NPOのスタッフで、千葉市で活動している放課後子ども教室総合コーディネーターの岩瀬と久野。

どうやって一般の人から「市民先生」を発掘しているのか、人材発掘を担当するのはどんな人が向いているのかを紹介しました。

「街行く人がみんな市民先生に見えます」と笑顔で話す岩瀬は、「個人の市民先生」を日常生活の中から発掘。日ごろから名刺を持ち歩き、自身の友人をはじめとして、受診した歯医者さんなどビビッと来た人に声をかけると話しました。

コメントでも続々と質問や感想が寄せられ、頷きながらメモをする参加者も。筆者自身も、質問や回答を通して「市民先生」への理解をぐっと深めることができました。

市民先生を確保するため

① 個人の市民先生の発掘

向いている人

- ・ 知り合いがたくさんいる
- ・ 誰とでもすぐに打ち解ける
- ・ 気持ちの切り替えが早い
- ・ 他人に話しかけるのに抵抗がない

日常生活の中から人を発掘!

【具体的には】

- ・ 既存の友人、知人等に声をかける
- ・ 新しく知り合った人でビビッときた人に声をかける  
(受診した歯医者さん、美容師さん、大学時の研究室集まり等)
- ・ 知らない人にも声をかける  
(何かのサークルっぽいファミレス客、道歩いていて変わった家の人など)
- ・ イベントなど必ず声をかける、プライベートでも名刺持ち歩く



市民先生を確保するため

② 法人・団体・大学などの市民先生の発掘

向いている人

- ・ 効率よく物事を進めたい
- ・ 計画的に動くのが得意
- ・ 営業経験がある
- ・ キーマンを見抜くのが得意

ターゲットが集まる場所にアプローチして発掘!

【具体的には】

- ・ 大学祭へ出向いて学生や教授に声をかける
- ・ 学生ボランティアを取りまとめている部署・人へアプローチ
- ・ デパートでワークショップをやっているところに行く
- ・ 顔が広い人と仲良くなり、紹介をいっぱい受ける



Q. 市民先生のプログラムが子どもにうけなかったり、失敗することはある？

A. 時々あります。サポートとして、事前に打ち合わせをしたり、当日の進行を手伝ったり、盛り上げたりしています。

Q. 地域の第三者の大人との協働にあたって、安心・安全管理をどうしている？

A. 放課後NPOでは、講師やボランティア全員と誓約書を交わしています。誓約書を交わすことに難色を示す方は、検討してお断りをすることもあります。

うのは難しいと思うので、大人が普段の過ごし方や様子に合わせてあげて、発達とともにやりたいことが少しずつ増やしていければよいと思います。

### ■実践事例共有－「地域、保護者で集える活動づくり～お祭り～」

都内の小学校でアフタースクールを運営している放課後NPOスタッフ齊藤と武田からは、今年の夏に実施した「お祭り」（以下、「サマーフェス」）をレポート。

「サマーフェス」は地域交流の場となることを目的に、全2日間にわたって開催。1日目、地域の方々が主催したお楽しみブースには、近隣の印刷会社からの「ぬりえ」や美大生の「アートブース」など8つのお店が。2日目には子どもたちが主体になって「アイロンビーズ屋さん」「しゃてき屋さん」などを出店し、さらには日々の想いを叫ぶ「告白大会」も実施されました。

#### 1日目 地域の方主催のお楽しみブース

かき氷

放課後NPO  
779-8904



アートブース  
(美術大学生)

わたあめ



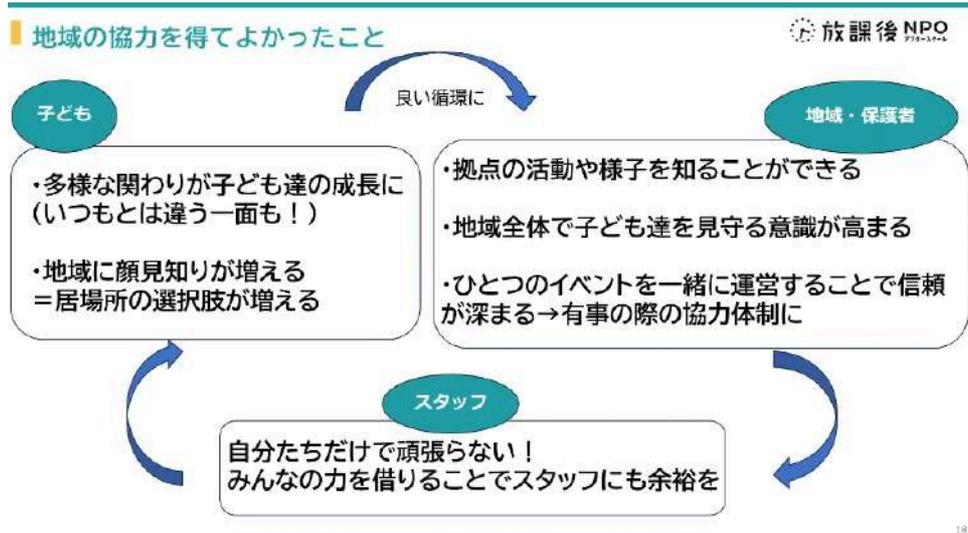
アイロンビーズ屋さん



ボーリング屋さん

地域の大人として子どもたちとの関わり方を手探りしている方にとって、「出店」とやる事がわかりやすくなっていると動きやすくなる。協力する側にとっても嬉しいポイントですね。

また、この拠点では地域とのつながりを発展させることで、物品の貸し出しなど更なる協力を得られたそう。拠点スタッフだけではなかなか実現が難しいことも、多くの大人が手を取り合うことで可能性がより広がるのだなと思いました。



Q. 地域の協力者には高齢者も多い。お願いや関わり方にポイントはありますか？

A. なるべく負担の少ない部分のサポートをお願いしている。今回の「サマーフェス」でも、1つのお店をというのは負担になってしまうので、スタンプラリーのスタンプを押してもらうなどをお願いしました。

Q. 特に盛り上がったお店は？

A. 体験をするものが人気でした。ポウリングなど得点で景品がもらえるもの、ハーバリウムやスノードームづくりなど。

### ■実践事例共有ー「学校施設全体を活かした活動設計」

続けて、放課後NPOで運営しているアフタースクールの事例を基に「学校施設の活用方法」と「学校との連携」について紹介。

都内で運営しているアフタースクール拠点の1つでは、「この時間はみんなで〇〇をする」といった時間は定めず、子どもたちが自分で何を・どこでするのがかを選ぶことができます。

学校から毎日異なる4~5つの部屋を借りてそれぞれの活動に割り当てをしており、「その



他にも、「放課後専用ではない場所をどのように活用しているのか」を別の都内アフタースクール拠点の例からご紹介。

この拠点では放課後用の部屋がないため、普段学校でオープンスペースとして授業でも使われる場所を利用。放課後の時間には可動式の机や棚を配置することで、子どもたちの居場所をつくっています。

特徴的なのは、地域の人々が作ってくれた本棚やランドセル置き場といった棚。キャスター付きで自由に移動させることができるため、準備や原状復帰のやりやすさ、子どもたちに合わせた環境設計が可能になりました。



## 可動式家具 でどこでもアフタースクール

こうした学校活用のために学校側とコミュニケーションを重ね、信頼関係を構築。

学校側への相談の際、施設利用NGな場合はその背景にある考えを想像してみる。学校優先というスタンスを崩さず、学校側の懸念も含めてリスクや対策を一緒に考え認識を合わせる。そして学校施設をなぜ利用したいの目的や、実際に利用する子どもの声を届け、知ってもらうこと。大人も子どもも利用時のルールは守ること。

**Q. 引率無しでの教室移動は、どうやって学校に許可を取った？**

A. まずはスモールステップで、相談し合いながら少しずつ実現していきました。最初は全て大人が引率していましたが、移動したい子だけを引率したり、学校の授業に支障のない道を子どもたち自身で引率するなど、数年かけて少しずつどこまで大丈夫なのかを学校の先生と確認しチャレンジしていきました。

**Q. 学校施設利用にあたって、セキュリティや鍵の管理はどうしている？**

A. 基本、現場から副校長先生や教頭先生といった窓口になる先生方にご理解いただけるようコミュニケーションをとっています。鍵の受け渡しについて、夏休みや夕方までの開室でも先生方や管理の方がいらっしゃるため、学校内に放課後NPOのみになることが無いこと、また、放課後NPOで利用している居場所や動線は1~2か所と小規模なため、施錠をする箇所について取り決めを交わして運用しています。

**■Part3 「子どもの育ちを地域ぐるみで支えるために」**

最後は、文部科学省の能見様より、これまで紹介した実践事例を踏まえ、地域連携を後押しする国の施策や取り組みを事例を織り交ぜながらご紹介いただきました。

放課後での学校施設の一時利用（タイムシェア）では、特別教室の一時的な利用を各自治体に促し、利用の際には責任の所在を明確にしておくことと学校活用を円滑に行うことができると通知、**学校施設の放課後活用を推進している**とのこと。

実践事例共有の「学校施設全体を活かした活動設計」でも紹介したように、放課後が学校施設を使う上でのルールや緊急時の連携などを決めておくことで、学校側の負担感軽減やメリットも生まれ、お互いの距離感が縮まるのですね。

- 放課後の時間帯の特別教室（家庭科室等）を活用して、タイムシェア型の放課後児童クラブを開設。
- 事務については、準備室などを活用して放課後児童クラブの専用区画として利用。専用区画を確保するために、校舎外に物を置かず学校の物品を移動するなどして確保。
- 放課後児童クラブで使用する備品等は、専用区画からラック等に収納。児童のランドセル置き場は可動式のロッカーを用意。
- 学校、教育委員会、子育て支援部において、あらかじめ学校施設を利用するにあたっての確認事項（利用日時の確認方法や、利用のルール等）を協議し、確認文書を作成。

- 学校施設の活用にあたって責任体制の明確化を図るため、「ねりごクラブ」（一体型の放課後児童クラブ・放課後子ども教室）を実施するにあたり、教育委員会と各小学校長との間で、学校施設の使用に関する協定を締結。
- 協定書では、基本的合意事項として、「教育委員会は、小学校の学校教育に支障が生じないよう配慮の上、事業を実施するものとする」/小学校は、学校教育に支障がない限り、教育委員会が実施する事業に協力するものとする」ということで、学校施設・設備の使用と使用時間、管理責任、緊急時の対応、学校教育に支障が生じる場合の対応を明記しルール化。
- 協定書では、放課後児童クラブが放課後に使用するスペースや、子供の動線を図示して明確にする工夫が行われている。

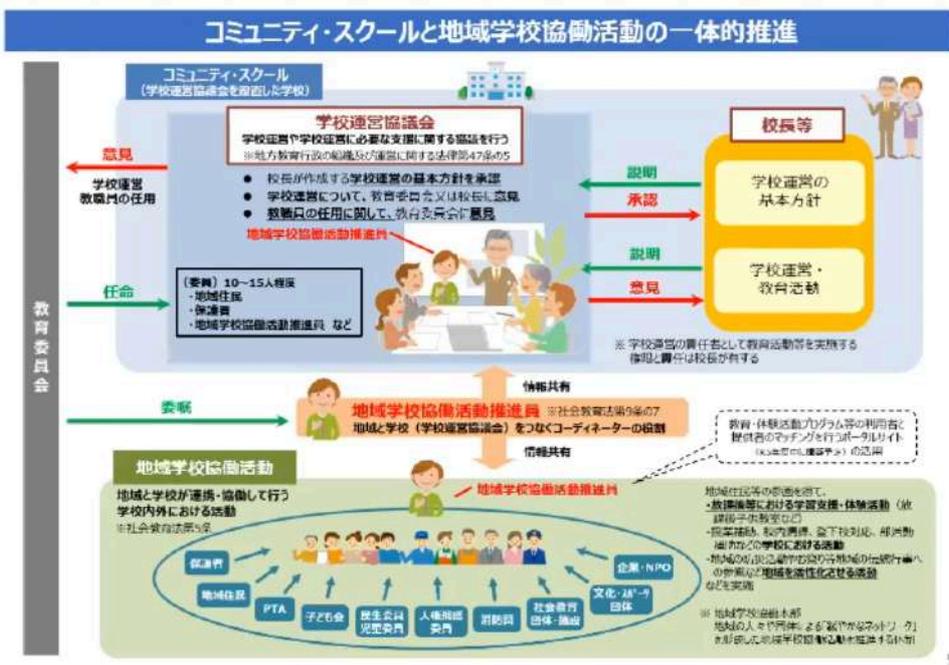
（協定書における際のイメージ）

○ ねりごクラブで恒久的に使用する設備      ○ ねりごクラブで日によって使用する設備  
 □ ねりご児童クラブで恒久的に使用する設備      □ ねりご児童クラブで日によって使用する設備  
 — ねりごクラブに属する設備      - - - 児童の動線によって移動する動線      — 出入口

地域全体で学校や子どもたちを支える「コミュニティ・スクール」は全国の公立小学校の約半数で導入。地域と学校がつながり、みんなで課題の解決に取り組む施策です。

八王子市の「コミュニティ・スクール」の例では、放課後児童クラブ関係者が運営メンバー（学校運営協議会委員）になったことで視点の共有ができ、学校外にあった放課後児童クラブを学校敷地内へ移転する計画を立てることがスムーズに進行。情報共有や連携もしやすくなるなどメリットがあったそうです。

地域と学校をつなぐコーディネーター（地域学校協働活動推進員）は全国に3万人。全国の自治体の7、8割が設置しているため、放課後NPOの事例のような放課後を専門とした人員配置が難しい場合でも、こうしたコーディネーターやコミュニティ・スクールとの連携により、可能性を広げることができるといった取り組みのヒントも提示いただきました。



が重要だと感じました。子どもが主体に活動ができること、協力してくれる大人も楽しめることを要点において活動をしていきたいと思います。

・全国に、子どもたちのために課題に取り組んでいらっしゃる方がたくさんいることが分かり、励みになりました。信頼できる大人がいる様々な活動が同時展開していて子どもは自由に渡り歩ける、そんな時間が過ごせる放課後、素敵だと思いました。

今回の勉強会では、日本全国からお集まりいただいた参加者の皆さん同士でチャットのやり取りをしていたのがとても印象的で、離れていても、立場が違っていても、皆様それぞれが「子どもたちにより良い環境を」と願っていることを強く感じました。

地域連携に向けて、大人同士での対話はパワーが必要になることも多く、なかなかすぐに実現できることではないかもしれません。

まずはスモールステップ、「こどもまんなか」を軸に少しずつ知ってもらうことや認識をそろえていくことが大きな一歩につながるのではと思いました。

次回、第6回放課後勉強会は3月を予定しております。続報をお待ちください！

文・放課後NPOアフタースクールスタッフ／伊嶋

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION

本研修は、日本財団様の助成により開催いたしました。

#### ▼これまでに実施した勉強会のレポートはこちら！

第1回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2022/07/36561/>

第2回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2022/12/38145/>

第3回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2023/03/39051/>

第4回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2023/07/39854/>

#### 【本件および研修会等のご依頼に関するお問い合わせ先】

特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール 事業開発チーム

Mail: [kaihatsu@npoafterschool.org](mailto:kaihatsu@npoafterschool.org)

※[at]を@に変換してください。

カテゴリごとに見る

アフタースクール

企業協働

行政協働

スタッフブログ

イベント

研修

遠足

月ごとに見る

年月を選択

## Recently

最新の記事



【ソニーグループ 感動体験プログラム】  
子どもも、大人も。可能性を拡げた、新しい挑戦だらけの半年間

2024.4.25 企業協働



【峡田小にこにこすくーる】HONDAの社員さんと「ものづくり」の楽しさを体感！

2024.4.15 アフタースクール



記者になって課題解決のヒーローを直撃取材せよ！私たちにはどんなことができるかな？

2024.4.12 企業協働

TOP

活動ブログ

【ご報告】第5回放課後勉強会「...

Page Top

私たちについて

About us

団体概要

採用情報

アフタースクール事業

After school

企業×NPO ソーシャルデザイン事業

Social Design Project

ご寄付・ボランティア

Donate / Volunteer

自治体の皆様へ

放課後運営団体の皆様へ

News お知らせ

Blog 活動ブログ

よくあるご質問

メディアの方へ

プライバシーポリシー

情報セキュリティ基本方針

お問い合わせフォーム

特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール

〒113-0033 東京都文京区本郷1-20-9 本郷元町ビル5F [\(地図を見る\)](#)

TEL : 03-6721-5043 / FAX : 03-6721-5044

[関西事務所はこちら](#)



Blog  
活動ブログ

## 【ご報告】第6回放課後勉強会「子どもまんなか！ 私たちで描く、これからの放課後」新年度に向けて、子ども支援の基本と実践

2024.03.24 研修

放課後NPOアフタースクールでは、放課後に関わる方や子どもの居場所づくりにご興味のあるすべての方を対象として、オンラインにて放課後勉強会を開催しています。第6回目のテーマは「新年度に向けて、子ども支援の基本と実践」。

当団体が培ってきたノウハウの中から、現場運営に活かせるケーススタディの共有や実践方法にポイントを絞って展開しました。全47都道府県の各地より、過去最多のお申込み総人数1,700名以上、100か所以上でサテライト視聴という結果となり、放課後の子どもの居場所に対する関心の広がりにとっても勇気をいただきました。

放課後NPO  
アフタースクール

第6回放課後勉強会 オンライン開催

新年度に向けて、  
子ども支援の  
基本と実践

子どもまんなか！  
私たちで描く、これからの放課後

参加  
無料

3月14日(木) 10:00-11:55

当日は、以下のプログラム構成にて勉強会を実施しました。本ページでは当日の概要をご報告いたします。

◆はじめに「私たちの仕事で大切にしたい価値観」

◆メインパート「明日から役立つ！実践事例とケーススタディ」

1. 子ども支援の基本と環境づくり
2. 安全管理とリスクへの対応

◆おわりに「放課後での子どもの育ちと私たちの成長」

◆はじめに「私たちの仕事で大切にしたい価値観」

当団体代表の平岩が、放課後＆長期休みの時間のほうが学校で過ごす時間よりも長いこと、学校と放課後では過ごし方が異なり、双方が力を合わせることでより子どもの力が伸びることが期待されることを、データを交えながら語りました。

<学校と放課後の子どもの居場所それぞれで過ごす時間（小学校低学年）>

学校で過ごす時間よりも、放課後＆長期休みの時間のほうが長い。

放課後の時間(小学校低学年)

放課後 NPO



(出典) 全国学童保育連絡協議会

<学校と放課後の子どもの居場所、それぞれ過ごし方が違う>

学校・放課後の子どもの居場所双方で力を合わせることで、より子どもの力が伸びることが期待される。

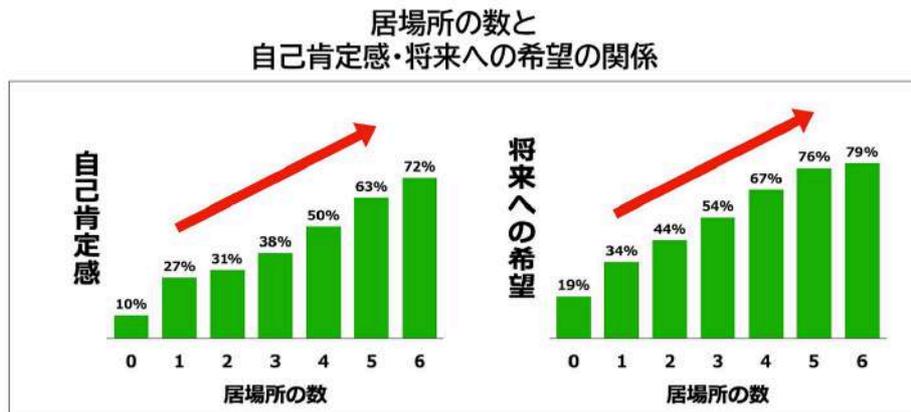
学校	放課後
① 計画された学びを しっかりと一斉に行う	① 自分の過ごし方を 自分で決める
② 状況変化よりは 予定通り実行が大切	② 状況は変化が大きく それに合わせて過ごす
③ 安定したメンバーの もとに落ち着いて学ぶ	③ 多様なメンバー 異学年とも遊ぶ
④ 正解を出す 大人は35人に1人	④ 納得解を探す 大人は10~20人に1人

10

そして放課後の価値を「居場所」と定義づけ、以下の調査データをご紹介します。

<居場所の数と自己肯定感・将来への希望は比例する>

### 居場所があると希望が増える



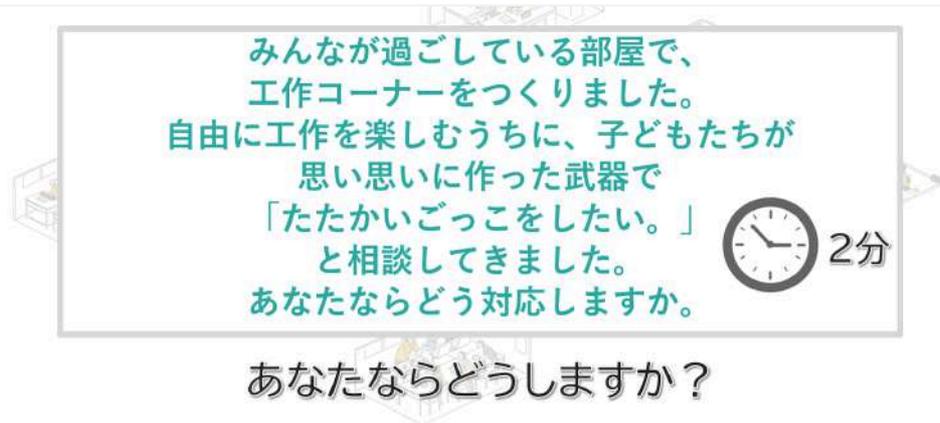
(出典) 内閣府「令和3年版子供・若者白書(概要版)」をもとに作成  
\*2019年度のデータ/小人数以下は四捨五入/15~29歳対象 (n=6000)

19

最後に平岩より「居場所の数子どもたちに好影響を与えるのであれば、家庭、学校が第1、第2の子どもの居場所と仮定した場合、放課後で第3以降の子どもの居場所をつくっていくことで、子どもの幸せがより増えていくのではないのでしょうか。私たちも放課後から子どもたちが幸せになるために、取り組んでいきたいと思います」とまとめ、オープニングトークを終了しました。

### ◆メインパート前半「子ども支援の基本と環境づくり」

勉強会に先立ち、参加申込みの皆様にご自身が必要と思われる研修内容について事前アンケートへのご協力をお願いしました。当日は、その結果として多かったトピックス「子どもへの支援」「安全管理」を取り上げています。具体的ケースを取り上げて皆様と意見交換を行った後、当団体の現場スタッフより実際の取り組み例をご紹介します。



参加いただいた皆様から、たくさんのコメントがチャットで寄せられました。以下はほんの一部です。

- ・防具（鎧、盾など）も製作出来たら最低限のルールの中でやらせてあげる。
- ・チームの共通理解のもと場所を2分して過ごさせる。
- ・どうしたらケガをしないでたたかいごっこができると思う？と聞いてみる。
- ・基本的に当たっても痛くない素材で作らせてあげる。
- ・「お互いの体には触れない」など安全面のルールだけ提示して、進め方や子どもが考えたルールをまず聞いて、一緒にどうやったら考える。
- ・一緒に段ボール怪獣を作って、それを順番に倒す戦いごっこを提案して一緒にやる。
- ・ルール決めと場所の提供さえできれば行えるのではないか。工作で使用する材質も吟味する。
- ・ケンカになることを想定してついつい「やめて」と言ってしまうそう。
- ・「たたかうのは、おすすめできかないな〜。ゲームにするならいいよ。それとか、作ったものを見せ合うのはどう？」
- ・まず肯定する！その次に場所や気を付けることを一緒に考える。

当団体現場スタッフの石井からは、「0か100の二択ではなく、解決策にグラデーションをつけるよう心がけています」とお伝えし、団体での取り組み事例から以下のポイントを紹介しました。

### 1.言葉をそのまま受け止める

→気持ちをそのまま受け止めるため。例) 「たたかいごっこがしたいんだね。」

### 2.話を聞く

→言葉の裏に隠れている気持ちを知りたいから。例) 「単に戦いたい！」

「作ったもので遊びたい！」 「発散したい！！」等々。

### 3.対話して解決策を探っていく。

→対話ができれば「0か100」の二択から1〜99の解決策が生まれてくる。

③対話してくれたことへの感謝を子どもに伝える。

「納得感があるところに着地させるべく対話を行うこと。見つけた解決策がその時はベストな解説策。正解はひとつではないと思います」とまとめ、最後に、事前にご質問いただいた内容に対して当団体での取り組みをお伝えしました。ここでは一部をご紹介します。

**Q：個別の対応が必要な子に対して、周りの子が「どうしてあの子だけ」ということがあります。どう対応すべき？**

**A：質問してきた子に対して状況説明と理由を伝えます。それで納得しない場合は裏の理由が隠れている可能性が高いので、質問の理由を探ります（「ずるい」「私も実はあれをやりたい」等々）。それに対して回答することで、子どもに納得感を持ってもらえるよう心掛けています。**  
**Q：「ひまだなー」「何もすることがなーい」という子たちにどんなアプローチをすればよいでしょうか？**

**A：環境づくりの工夫で解決を図ります。**

<取り組み例1：その日の流れや活動場所などをホワイトボード等に表示>



その日の流れや活動場所などを表示。自分で過ごし方の見通しが立つように。

30

<取り組み例2：できることの視覚化>



活動場所に名前を付けて、できることを視覚化。やってみよう！環境を。

31

<こんな場合どうする?>

## ケーススタディ②

🕒 2分

新入生も利用している4月中旬、来室者が約90名。40名程度の子どもが校庭で遊んでいて、校庭遊びの担当スタッフは3名です。

2年生が鉄棒で遊んでいて、頭から地面に落ちてしまったと泣きながら報告がありました。意識はあり、大きなけがではない様子です。

## あなたならどうしますか？

Copyright © 特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール All rights reserved.

54

前半同様、参加いただいた皆様からたくさんのコメントがチャットで寄せられました。

- ・ 必要な応急処置をしたのちに、保護者に連絡する。
- ・ 部屋にいるスタッフに応援にきてもらう とりあえず冷やす。
- ・ 頭から墜ちているので、医者の診察を受ける。
- ・ いったん落ち着ける場所へ行って観察。
- ・ 別室へうつし、様子観察、保護者へ連絡。
- ・ 教室に連れ帰る。責任者に報告。状況を見て、保護者に連絡、ケガがあれば消毒など。
- ・ 頭から落っこちたなら動かしてはいけない応急救護の基本。
- ・ まわりの子もたちにも安全について声かけ。
- ・ まず指導員同士の連携と頭を打ってる場合は保護者に連絡。
- ・ 一人はその場について確認、一人は他のスタッフを呼んでもらう。

時田より、「活動していればケガはおこります。予防とチーム対応で大きなケガにしないことが大事だと思います」と前置きし、自身が心掛けていることを以下のようにまとめました。

### ・ 予防で心掛けていること

#### 1. 死角を作らない見守り体制

→ 複数人で対応する場合はお互いの役割分担を明確にすること。  
各スタッフの力量に合った役割分担を心掛けること。

#### 2. 全体把握から個別への意識を持つ

→ 新年度は、子どもとの関係性構築のために子どもの遊びに入り込みがち。  
でもスタッフの役割は全体把握。できるだけ俯瞰的に見守るようにしたい。

#### 4.ルール作りを子どもと一緒に行う

→遊ぶ時のルールを子どもと一緒に作ることで、ルールへの意識づけができる。

#### 5.クールダウンできる場所を用意

→子どもの視覚にスタッフ以外が入らない場所を用意しておく。

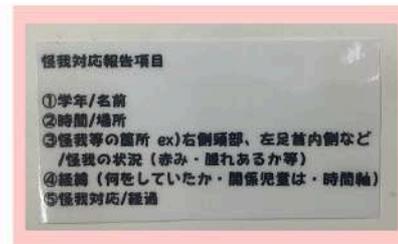
場所の確保が難しい場合はスタッフが壁を背にして子どもと向かい合わせになると、子どもは「自分だけの場所と感ずることができる。

#### 6.トラブルに対応する際のアイデアを共有する

→慌てていても確認できるように、スタッフ名札の裏に入れておく。

### アイデアの共有

慌てても確認できるようにスタッフ名札の裏に入れておく



おすすめが  
あればぜひ  
コメントを

マネすることやトライはしてみる  
合わなければやめればい

#### 7.チーム対応

→スタッフミーティングを頻繁に具体的事例を用いて子ども対応の目線合わせ・共通認識を持つこと。気になる子どもについては、対応記録を随時共有すること。

### チーム連携

#### スタッフミーティング

- ・ 具体的事例を用いて子ども対応の目線合わせ・共通認識
- ・ 気になる児童や要支援時の対応記録を随時共有

#### 学校との情報共有・連携

ケースによっては、  
子ども家庭支援センター・児童相談所とも連携

子どもが来ていない時間の  
スタッフ同士のコミュニケーションも  
最も重要な業務ひとつ



#### 8.第2・第3・・・の連携先を作る

→学校・子ども家庭支援センター・児童相談所等、各所との連携ができると一気にサ

<現場対応の流れ>

- 1.応急処置：子どもの意識とケガの状態確認。外傷がなければアイシング。
- 2.安全な場所の確保：他の子どもから離して落ち着ける場所に移動し、二次被害を防ぐ。
- 3.他のスタッフに共有：できれば複数人で対応することで対応のスピードアップ。

<確認すべきポイント>

- 1.ケガの範囲：子どもが訴えている部位以外の変化の有無。
- 2.トラブル発生時の現場状況：二次被害につながるものがないか確認。
- 3.トラブル発生の要因把握：いつ・誰が・何をしていた・どんなきっかけで等、詳細な情報収集に努めること。

<事後対応>

- 1.病院へ連絡：大きな変化がない場合でも首から上の事故は念のため病院へ（迷う場合は各地域の相談窓口へ連絡）。
- 2.継続して様子を観察：急変の可能性に備える。
- 3.保護者へ連絡：必ず行うこと。その際、確認した事実を詳細かつ正直に伝えること（クレームになりづらい）。

最後に時田より、「安全管理は大変だと捉えられがちですが、安全の土台の上に楽しい放課後があると思います。子どもは禁止=自由がないと捉えてしまうので、放課後の意義を大切にするためにも活動の制限はできるだけ避けたいですね。子どもと一緒にルールを決めることで最適解を見出し、お互いに安全管理に取り組んでいくことで、楽しい放課後がつくっていったらと思います」と、安全管理への思いをお伝えし、メインパートを終了しました。

◆おわりに「放課後での子どもの育ちと私たちの成長」

お申込みいただいた方から事前に寄せられた、皆様の現場でのエピソードを共有して勉強会を終了いたしました。

コロナ禍の三密回避の活動から一気に以前の児童クラブの活動ができたこと。遊びをテーマに各児童クラブが挑戦して取り組んだ活動が、異年齢交流という児童クラブだからこそその活動ができました。活動の幅を広げることで子どもの笑顔とスタッフの充実した笑顔を得ることができました。(滋賀県)

4月当初、自分の気持ちを大声で叫んだり、暴力で表現するしかできなかった1年生の男の子が、2月に入ってから、じっと話を聞けるようになり、自分の思いを少しずつ

鬼ごっこやドッジボールなどの集団遊びをする際に子どもたち同士でルールや約束を相談するようにしてもらっています。何年か続けているうちに子どもたちの中で、遊ぶ前には、まず相談する、ことが定着してきました。今では支援員がいなくても遊ぶ前には必ず相談をしている様子が見られています。大人から教えてもらうのではなく、子どもたち同士で教え合ったりしていく姿が素敵だな、と思い嬉しくなりました。(千葉県)

いつも憎まれ口を叩き、なにか話すことと言えば「俺は将来ヤクザになる」「引きこもりニートになって、ずっとゲームをして20代で死ぬ」ということばかりを言っていた男の子。ある日、わたしとその男の子、一対一でキャッチボールをしていると、「おまえってさあ、酒飲むの？」との男の子からの投げかけ。「めっちゃ飲むよ〜(笑)」と答えると、「じゃ、いつかおまえと酒を飲みに行くわ」とポロリと漏らしたことがあった。日々の実践で迷ったり、傷ついたりすることもあったが、とても嬉しかった。大人同士の人間関係で悩むことも多い職場だが、11年後のその日を夢見て、同じ児童クラブで働き続けることを決めた日になった。(島根県)

2023年のこども基本法の施行、こども大綱の決定を踏まえてより一層「こどもまんなか社会」の実現が求められる2024年度を迎え、放課後の活動や子どもの居場所づくりにおいてもその実践力の向上が必要になります。今回の勉強会では、まさにそのど真ん中で日々活躍されている皆様の意欲と熱い思いをひしひしと感じました。

次回、第7回放課後勉強会は秋を予定しております。続報をお待ちください。

文・放課後NPOアフタースクールスタッフ/長友

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION

本研修は、日本財団様の助成により開催いたしました。

▼これまでに実施した勉強会のレポートはこちら！

第1回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2022/07/36561/>

第2回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2022/12/38145/>

第3回：<https://npoafterschool.org/archives/blog/2023/03/39051/>

【本件および研修会等のご依頼に関するお問い合わせ先】

特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール 事業開発チーム

Mail: kaihatsu[at]npoafterschool.org

※[at]を@に変換してください。

LINEで送る

シェアする 0

ポスト

Previous

【開智アフタースクール】子どもたちが主体的に過ごせる放課後っ...

TOPへ

Next

【トキワ松学園アフタースクール】子どもたちの豊かな心を育む「...

カテゴリごとに見る

アフタースクール

企業協働

行政協働

スタッフブログ

イベント

研修

遠足

月ごとに見る

年月を選択

## Recently

最新の記事



【ソニーグループ 感動体験プログラム】子どもも、大人も。可能性を上げた、新しい挑戦だらけの半年間

2024.4.25 企業協働



【峡田小にこにこすくーる】HONDAの社員さんと「ものづくり」の楽しさを体感！

2024.4.15 アフタースクール



記者になって課題解決のヒーローを直撃取材せよ！私たちにはどんなことができるかな？

2024.4.12 企業協働

About us

団体概要

採用情報

After school

企業×NPO ソーシャルデザイン事業

Social Design Project

ご寄付・ボランティア

Donate / Volunteer

放課後運営団体の皆様へ

News お知らせ

Blog 活動ブログ

よくあるご質問

メディアの方へ

プライバシーポリシー

情報セキュリティ基本方針

お問い合わせフォーム



特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール

〒113-0033 東京都文京区本郷1-20-9 本郷元町ビル5F [\(地図を見る\)](#)

TEL : 03-6721-5043 / FAX : 03-6721-5044

[関西事務所はこちら](#)

